態と分類に関する情報が述べられている．

冒頭に力作であると述べた．それだけにミスプリントが散見されるのが惜しまれる．10ページにチョウカイアザミが掲載され，学名は *Cirsium borealinipponense* Kitam. とある．新見解か？　と思いリストを参照すると，*C. chokaiense* Kitam. となっている．単なるミスプリントのようである．76ページのユキツバキの学名も訂正する必要がある．学名の著者名（author name）は，本誌も推奨する Brummit & Powell: Authors of Plant Names (1992) に基本的にしたがっているようであるが，統一がとれていないところがある．次回の訂正を期待したい．申し込み及び問い合わせ先は次のとおりである．〒999-[redacted] 山形県飽海郡[redacted] Tel [redacted] 土門尚三氏まで．（門田裕一）

□茂木　透（写真），石井英美ほか（解説）：**樹に咲く花　離弁花1**　719 pp. 2000. 山と渓谷社．￥3,600（税別）．

日本の樹木の写真集である．日本に自生するものと，良く見かける栽培種が載せられている．ただ小笠原や琉球の一部の種類は欠けている．それぞれの種類の全形図だけでなく，葉や芽，木の肌，花や果実の大写し，など特徴となる部分図が豊富に載せられているし，近縁のものはそれぞれ写真を並べて違いがわかるように工夫されているなど，従来の図鑑にない積極的な試みがなされている．それぞれの写真は見事で，写真や印刷の技術も進んだ感を抱かせる．離弁花類第2巻と合弁花類，単子葉，針葉樹を含めた第3巻とが予定され，本年度内には出版されるという．全部そろうと画期的な写真図鑑になるであろう．ただ素人向けに編集されているので，研究者にとってはもの足りない感じもする．（山崎　敬）

本書の'はじめに'で，茂木氏は木の一生を人間にたとえ，本質的なものの多くが日常の何気ない出来事の集積からなり立っていることが多く，このことは木にも当て嵌まるので，木の生活史にもっと目を向けることが重要なのではないか，と記している．これが茂木氏の写真撮影の根底にある考え方であるといってよい．茂木氏が木の枝葉や花・果実に留まらず，樹形，樹肌，冬芽，種子など，実に様々な部分に焦点を当て写真を撮られている，ということを同じ写真家の木原　均氏から伺ったのはもうだいぶ前のことであった．それがようやく結晶したのが本書である．'樹に咲く花' は3巻からなり，Engler の分類体系（1964年）による配列で，日本に自生する（実際には栽培される種も若干含む）樹木をヤマモモ科からセンリョウ科，そしてバラ科を本書1が扱い，スズカケノキ科以降が離弁花2とし，合弁花，単子葉，裸子が3として刊行される予定である．

木では花や枝葉でさえ，写真化するのは素人には不可能と思われるくらい難しい．このことを独力でやり遂げるだけでもさぞやたいへんと思うのだが，冬芽や種子，樹肌など，さらには解剖学的写真などをも撮影したのである．どれだけの時間の費やしたことだろう．その忍耐力には脱帽したい．世界の温帯でも一際高い多様性をもつ日本の木本フロラであるが，本書の出現はこれをたいへん身近なものにしてくれた．図鑑として世界に誇れる一冊である．（大場秀章）

□吉田外司夫（写真・解説）：**天の花回廊　ヒマラヤ・中国横断山脈の植物たち**　143 pp. 2000. 朝日新聞社．￥4,800（税別）．

ヒマラヤからチベット，中国横断山脈を中心とした地域の植物写真を撮影される世界の写真家の中でも本書の著者であり撮影者である吉田氏は他の写真家の追従を許さぬ特技をもつ．それは氏自身が対象とした植物を現場で属レベルは無論，おおむね種のレベルで同定でき，類似種から区別する特徴をわきまえて植物に接していることである．芸術的な観点からの評価は判らないが，吉田氏の写真はその植物のもつ特徴がよく捕らえられて植物学の立場からみるとたいへん参考になる．

本書はアサヒグラフに連載されていた'天の花回廊'という連載記事を纏めたものであるが，巻末に収録した種についての簡素な記載が付されている．本文は吉田氏自身の撮影植物との出会い，その植物にまつわるエピソード，研究史や問題点など氏の豊富な知識が随所に散りばめられていて，興味深い．中国・ヒマラヤ地域植物への入門書としても広く推薦したい一書である．（大場秀章）